

詩時評

第33回

心の往還を
書きとめる

松本衆司

阪神が岡田監督の言う「アレ」を実現した。十八年ぶりである。二〇〇三年も一九八五年以来の十八年ぶりの日本一だった。その前のリーグ優勝は一九六四年だったから、八五年は二年ぶりだった。熱狂的ではないが私も大学時代以来の阪神ファンなのでとても興奮した。一九六四年の二年前にも阪神はリーグ優勝をしており、その昭和三十七年の日本シリーズは東映対阪神だった。小学三年の私は東映フライヤーズが好きで、大切な白い野球帽にはFのマークをつけて東映にわくわくしていた。岡田監督の「アレ」のお陰で、無邪気な少年時代と行き来してしまった。

堀内統義詩集『ふえつくしゅん』（創風社出版）を読む。「春うらら」を引く。

いまだきめずらしい柱時計／振り子の揺れがゆるやかに時をささむ／雨上がり春の終わりの昼どき／ニッキ・パロットの歌う／イエスタデイ・ワンス・モアに耳を傾けながら／明治に建造された蔵に／少しばかり手をいれた私設の／ピクチャアー・ブック・ライブラリーで／受け付けの仕事を楽しんでいる／老後のボランテア／わが三津浜 ぼくが生まれ育った町で／もういっぺん見知らぬ人たちと触れあいを／ほんやり平凡な時の流れにたたずむように／うけとめて年とったぼくは坐っている／深まる春のこの静かな／昼の青葉の影を浴びながら／この世のどこかにいるように

一つの物語を読むような一冊の詩集だった。所は四国松山で、登場人物は昭和二八年に小学校に入った主人公の男の子、そして親兄弟に親類縁者。気負いなく洒落な筆でエピソードや懐かしい時代の情景が描かれる。うぶすなを愛する詩人堀内統義の真面目である。

朝倉裕子詩集『母の肩』（編集工房ノア）を読む。「センダン」を引く。

御手洗川に沿って／市民運動場がある／角に植えられたセンダンの樹／足下に小さな実や柄が散らばって／見あげると／すっか

り葉を落とした枝に／無数の実／四角い照明塔の明かりで／冬の夜空に／黄金色の球をばら撒いたようだ／／気になっていた耳の不調／定年で退職し病院通い／住み馴れた街は／素知らぬ顔で／いつも／美しく装っていたのだ

日々の感情のむこうに、変わらざるのちの佇まいがある。詩人朝倉裕子はその心の往還をさり気なく書きとめる。「母」の晩年に寄り添いながら、その心の往還が詩集に鏤められている。

古賀博文詩集『封じられた記憶』（書肆侃侃房）を読む。長詩「封じられた記憶」の最終の章を引く。

時折、塩の結晶が砂のように／ザザッと、ザザッと、ザザッと／上部から低位置へ流れ落ちていく／よく見ると当地には塩が自然流下するほど／風化、乾燥した部分と露出したケロイド症状の湿気を帯びた部分がある／／私の脳裏にある決定的な確信が甦った／ああ、これは私のなかで／今までずっと（封じられた記憶）だったもの／間違いない 見覚えがある／かつて私は来たことがある／この地に！／／遙か以前私はこの地で日々を過ごしていた／そして、

この地に潮満ちた時／周囲の〈存在〉達とともに／私は陽の当たる場所へ一挙に押しだされていったのだった／それがいつだったか思い出せないがその時は必ずくる／百年後か、千年後か、一万年後か／戻ってきたのだ　ふたたびこの地に！／私はこれから当地で気が遠くなるほどながい／ながい静寂で孤独な待ち合わせをしなければならぬ／押しだされる日まで風の群れを追い、狼の群れに追われ、塩の流砂を傍観し／ケロイド症状に湿り、原色の花火に酔い痴れ／月の満ち欠けに慰められながら生きていく／偶然とまったらはずの／難破船のマストだったが／じつは運命的な場所／前回も私はここをねぐらの拠点にしていた記憶が甦る／前世、前々世、前々々世、前々々々世から／私に与えられている定位置／マストから延びる白い菌糸のようなものが／執拗に私の尻尾に絡みつく／それは運命の糸ならぬ／私とこの地をつなぎとめ、結びつけるもの　私はその菌糸からめとられる／この場所ですた方もない／難破の日々がふたたび積み重なっていく

私たちはどこから来てどこへ行くのか、そのような原初の問いが誰しにもある。その生と死の間にあるような、古代から連綿と続く魔訶不可思議な世界が古賀博文という詩人の

脳裏に広がっている。世俗を逃れ無心となることで、その情景がかくもリアルに出現する。

新しい詩集『死んだ女』（詩遊社）を読む。
「ふふ・ふふふ」を引く。

「夫婦ってなんだと思う」／あの人に問うてみた／「ふう！　と／うふつ　だよ」／「こじ付けでもあるような／駄洒落でもあるような／分かったような／分からないような／迷答／名答でもあるような答えね」／「だろ？」／したり顔が返ってきた／少年のような表情がおかしくて／「ふふ・ふふふ」／と笑った／「それだよ／笑ってくれて　ありがとう」／嬉しそうに笑った／おまげがついた／「笑わせてくれて　ありがとう」／はは・ははは／ふふ・ふふふ　他愛もない夫婦の会話がいい。さり気ない笑顔がいい。夫婦の愛の詩集って、あるようでないのかも。と思いつつ、詩集の中の幸せを味わう。天衣無縫という言葉が似あうほどに新さんの夫に手向ける心が描かれている。

愛敬浩一著『草森紳一は橋を渡る』（洪水企画）を読む。草森紳一の『ナンセンスの練習』（晶文社・一九七一年十一月）収録の「叫ぶ」の引用の部分を引き。

彼の絵は、泣き叫んでいるように思われる。それは単純な意味で、泣き叫んでいるのだ。絵画は、つねに時代の悲鳴を伝えているといういいかたは、この場合、作品行為そのものに対していえることであって、抽象であろうとポップであろうとかまわわないのだが、ペーコンの場合、塗りつぶされた画面の人物そのものが、泣き叫んでいるのだ。

僧正も、高級サラリーマン風の男も、ベッドでからみあう男と女（男と男）も、チンパンジーか人間なのかわからないものも、窓から街の風景のみえる高層アパートの一室の人間らしいものたちも、一様に泣き叫んでいるように思われる。それは、単に泣き叫んでいるのではなく、その泣き叫びには、たくさんの属性、意味性がひそんでいて、みるものは息がつかまるほどだ。苦痛、怖れ、狂気、崩壊、傷心、さびしさ、怪奇さ、暗く、ファンタジックで苦々しい、失意にみちた意味性が、ごったになって、曖昧に内にこもっている。この曖昧な多意性が、この泣き叫びの構造を形成している。

筆者はこのエッセイ集で「雑文」とは何かに触れながら、その系譜をも辿っている。漱石が自らの表現の原点を「文」としたと同様の意味を「雑文」に見る。「甲子夜話」の松

浦静山、『エセー』のモンテーニュ、そして草森紳一、愛敬氏の言う彼らの「雑文」は実存の深淵を見つめる力を源泉とするものだ。

服部証詩集「祭りの夜に六地蔵」(思潮社)を読む。「わたしたちはみんな棲処に帰る」を引く。

子どもの頃から乗り物酔いをするたちだった／特にバスには弱く／遠足のために気分が悪くなった／おとなになってからも／バスに長く乗っているのは苦手だ／ジャンボジェットが墜落して／親しかった友人や同僚たちがいちどきに亡くなり／葬式がつづいた夏の終わり／会社帰りに偶然見つけたのは／大阪梅田から箕面まで行く路線バスの乗り物／阪急電車に乗れば三十分で帰る／着く箕面まで／一時間半もかかる(と時刻表に記されて)／バスに乗って／どれもわざわざ帰ろうとするわけではない／そんな奇妙な路線バスに／自分でも解せない気まぐれを起こして／迷いながらも乗ってみた／始発の梅田バスターミナルから乗り込む客はそこそこにいて／この人たちはみんな終点の箕面まで行くのかしらんと訝しが／ほとんどの客は淀川を越えたあたりでさっさと降りてしまう／そのあとしばらく阪急電車と並行している国道一七六号の

道筋では／高齢者バスの人たちがぼつりぼつりと短い区間を利用するだけ／阪急豊中駅に近づいたあたりでようやく客が増えてきた／——あなるほど こんなふうにして／近隣地域ごとの普段づかいの区間が／いくつから数珠つなぎになって／どのつまり梅田から箕面までが／ひとつの路線として運行されているのだな／豊中駅前でもんな一斉に降りてしまったあと／ひとりだけ残ったわたしが／次に混みはじめるのは箕面市内に入ってからかと／見当をつけていたら あら不思議／天狗が大勢乗ってきた／はじめは夏祭りか何かの一団かと思

っていたが／よくよく見れば天狗の面をかぶっているわけではない／真正正銘 高い高い赤鼻をした天狗たちだった／あわてて窓の外を見わたしても／ごく普通の町並が続いているばかりで／天狗などどこにもいない／いつもと変わらぬ夏のおそい夕暮れ／／誰ひとりあいて座席には座らず／律義に吊り革を握っている天狗たちは／への字に口を閉ざしたまま宙の一点を見つめている／ひさしぶりに長い時間乗ったバスに酔って／ぼつぼつ気分が悪くなってきたわたしを乗せて／バスはいつまで経っても／終点箕面駅前にはたどりつかない／／天狗たちで満員のこのバスは／御巢鷹の尾根にあるという／深い森のなかの彼らの棲処まで

／このまま夜がな夜つびいて／走りつづけてゆくのだろうか

路線バスに乗り、日常から非日常の不思議な世界への誘いという設定である。その底には一九八五年の日航機墜落事故による人生を全うできなかった人々の悲しみが漂う。バスは停留所に着き、多くの人が乗降する。そのシーンに人生のさまざまな契機が重なりもする。それを「普段づかいの区間が／いくつから数珠つなぎになって／どのつまり梅田から箕面までが／ひとつの路線として運行されているのだな」と、さりげなく描く。だが、その日常に終点はなく、最後は、満員の「天狗たち」とともにバスに揺られながら、「深い森のなかの彼らの棲処」に帰る。

坂井一則詩集「あなめあなめ」(コールサック社)を読む。「空に聴く、朝」を引く。

空が鳴っていた／／あれは確かに／風が鳴っていたからではなくて／空が高いところから久しい人や大切な人と／語らおうとしていたからではなかったか／／そのように／愛おしく慈しむ者は／地上であまねく光に震えている／／するさとうだろう／／突然／激しい渦巻きのような強風が起ち／空に立つあらゆる織物を吹き飛ばし／地上と天

上の間は／私たちと青空だけの時間となる
／空に吹く喇叭の朝が／私たちを秋へと
呼び込むのだ

この坂井一則の詩集を読みながら「天と地
の中間にあつて、ためらいつつ、あこがれつ
つ、闘いつつ漂っているように、人間の魂も
時間と永遠の間をためらいつつ、あこがれつ
つ、闘いつつただようのである」というヘッ
セの『郷愁』の一節が浮かんだ。詩集『あな
めあなめ』は、いのちを語る詩人の作品だ。

高畑玄一詩集『もぎ取られた言葉』（コー
ルサク社）を読む。「標的とされた希望―
ゾラの復活を願う―」を引く。

二〇一五年 アフガニスタンで女性だけで
構成された楽団「ゾラ」が結成された 民
族楽器を使うアフガニスタン伝統音楽を融
合させた優美な演奏はたちまち話題となっ
た／「ゾラ」は十三歳から二十歳の女性だ
け三十五人で構成／孤児や貧しい家庭出身
のメンバーもいる／指揮者ザリファ・アデ
イバは二十三歳 アフガニスタン初の女
性指揮者だ／ザリファはタリバンによる
迫害の対象となってきた「ハザラ人」だ／
六歳の頃 隣国パキスタンに逃れた／そこ
でもハザラ人をねらった爆破テロの被害に

あい多くの友人を亡くした／「ゾラ」のメ
ンバーはアフガニスタン音楽院で演奏活動
を行ってきた／女性であることと音楽活動
に従事すること／それ自体がタリバンによ
つて「イスラムの教義に反する」と否定さ
れ「暗殺」の対象となる／アデイバの父親
は祖父から孫娘に音楽活動を続けさせるな
ら親子の縁を切ると言われた／いところら
は「見つけたら殺す お前は親族の恥だ」
と言われた それでも音楽を続けてきた／
タリバンが政権についた後の二〇二二年
十月六日／「ゾラ」のメンバーはアフガニ
スタン脱出を決意／カタール大使館の協力
を得て少人数に分かれて空港まで移動／空
港を占拠するタリバン戦闘員にビザを疑わ
れ／「臨時公用旅券では女性は出国できな
い」と言われるが／カタール大使館職員が
間に入り交渉 大半が脱出した／／いま
音楽院の校舎には音楽が聞こえない／ラジ
記号が描かれた木がある中庭では／カラシ
ニコフを抱えたタリバン戦闘員がたむろし
ている／タリバンは音楽だけでなく詩を
書くことも禁止した／わたしは 書かなけ
ればならない／詩とゾラのために／ため息
は積み重なるが あることさえ気づかれな
い／なから始めればいいのかさえわから
ない／失いかけた言葉を探しにいかなくれ
ば／ないがしるにされ続けてきたものを／

余白にしか書いて来なかったものを／引き
裂かれたものをもう一度修復しなければ／
一瞬が去ってしまうの前に／軽蔑し合う
ことより／想像力はお互いを認め合う唯一
の力／深夜のため息を積み重ねる／囚われ
ているものを解き放す／何かに委ねること
なく「何か」の在り処を探し歩く／平和で
戦争のない世界「イマジン」の世界を想像
する／夢かもしれない それでも今／夢を
忘却せず 生きようとする時だ／詩を書
く時だ

三章に分かれた詩集の、第一章の十四篇は
ロイターやAFPなどの国際ニュースを参考
にして書かれている。この詩もその一篇だ。
詩人は、映し出された放送画像の向こうにあ
る現実を見据え、事実を掬い取り、人間の許
すまじき差別や横暴を浮き彫りにする。まさ
に、権力者側の銃や爆弾が人々の暮らしを損
ね、夢や希望を、そして命までも奪おうとす
るその現実を描写する。宗教の言葉は本来、
魂の根元から紡ぎ出された「聖」であり、深
い倫理を意味する。それが歪曲されている。
ならば、その起源を同じくする詩の言葉こそ
が真実なのだ。「夢を忘却せず 生きよう
とする時だ」／詩を書く時だ」と言う高畑玄一
の言葉は尊い。